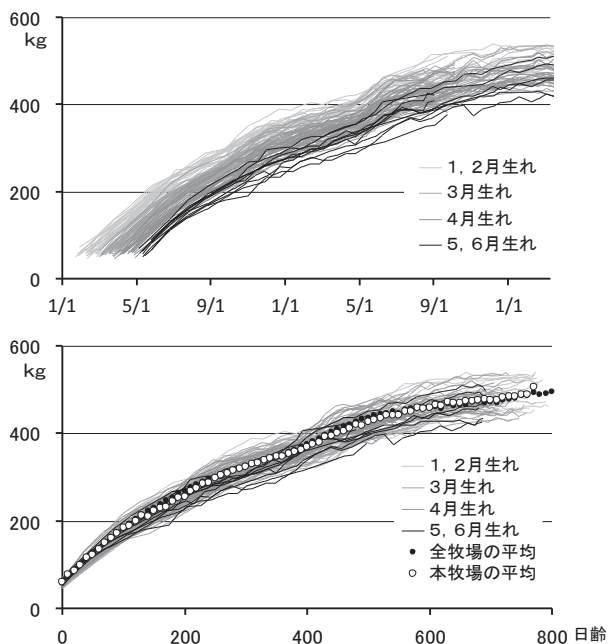


## 馬の発育の調査から — 馬ごとの発育の違い —

マンスリーレポート31から続けてきた馬の発育に関する情報として、今まではサラブレッド種の発育はとか、日高での発育はといった一般論のことから、牧場によつての違いにまで触れてきました。しかし、実際に馬の飼養管理をするときは1頭1頭の成長について検討することも多いでしょう。

図-1は日高のある牧場でここ数年間に生まれた約100頭の馬の体重の変化を1頭ずつの線で示したものです。ここでは、1頭1頭の成長の様子を、月日を追って示した図と、日齢で追って示した図で示しました。

図-1 個々の馬の体重の変化(生れ月別)



まず、月日を追って示した図を見ると、多くの曲線の中から、上にも下にも飛び出しているのが目に付きます。牧場で観察していても、その時点での大きな馬には、目を惹かれますし、小さな馬には不安になることでしょう。しかし日齢で追った図をみると、意外と差は無かったりもします。

図-1では線が多く個別の変化が読み取りにくいので、図-2では、特徴的な変化をした例を浮かび上がらせて示しました。

この牧場で、早生まれで大きな馬といえば、Aが特に目を惹いたでしょう。この馬は日齢を考慮しても特に発育のいい馬と言えます。遅生まれで小さな馬ではBが気になります。そしてこの馬も日齢を考慮しても発育は遅く、競走時には380kg

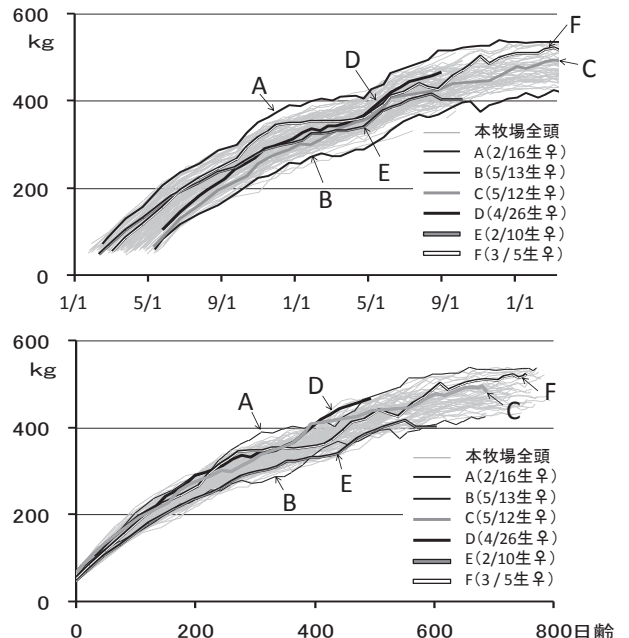
足らずで走っていました。

マンスリーレポート32では、遅生まれの馬もその多くは1歳の秋ころまでには、早生まれの馬に追い付くと書きましたが、Cは遅生まれながら順調な発育を続け、特に明け1歳冬の発育の停滞は少なく、その後の春から夏にかけての発育も良く1歳秋には平均的な大きさになりました。比較的遅く生まれたDは、さらに発育が良く、当歳の秋には平均的な大きさ、さらに1歳秋には大きな部類に入るまでになりました。そして470kgくらいで競馬をし、グレードレースでも優勝しています。

一方Eは、比較的早く生まれたにもかかわらず、1歳秋には全体のなかでも小さな馬になってしまいました。日齢を考慮しながら追っていかないと、発育の良くないことに気付かないかもしれません。実はこの馬は、47kgで生まれていたのです。牧場の方々が気を付けながら育てたのでしょう。420kg台で競走馬デビューをしました。

他に大きな変動のある成長の仕方をした馬としては、Fが挙げられます。当歳時は発育のいい馬でしたが、冬になると長い間、発育が停滞しています。しかし春から夏にかけて、また急な発育をしています。先に挙げたAも同じ傾向があります。

図-2 個々の馬の体重の変化(主な例を示す。)



小さく生まれた馬や、急に大きくなってきた馬、冬期など季節の変化や、離乳、飼養の変化によつて発育の変動の大きな馬は、その成長が気になります。周りの馬と比較するだけだと、早生まれで大きな馬や、遅生まれで小さな馬があると、評価を誤ってしまうでしょう。成長の経過は、体重や体高など数値で示せる記録を残し、それを連続的に見て評価をすることが重要なことだと思います。